

# 子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Depression symptoms during pregnancy and postpartum in patients with recurrent pregnancy loss and infertility: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

不育症及び体外受精と出産前後の母体の抑うつ症状との関連: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 愛知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Reproductive Immunology

年: 2022

DOI: 10.1016/j.jri.2022.103659

筆頭著者名: 大谷 綾乃

所属 UC 名: 愛知ユニットセンター

目的:

世界的に見ても、妊婦の約 10%、産後女性の約 13%が何らかの精神障害(主にうつ病)に苦しんでいる。周産期うつ病は妊産婦の自殺や児童虐待の重要な危険因子となる。不育症(RPL)の 8.6~33%、体外受精・胚移植(IVF-ET)の 10~25%がうつ病を患っているが、妊娠中から産後 1 年までうつ状態を追跡調査した研究は限られている。本研究では、RPL と IVF-ET が妊娠中および産後の抑うつ症状にどのような影響を与えるかについて検討した。

方法:

2011 年 1 月から 2014 年 3 月の間に研究同意を得てエコチル調査に参加した妊婦 104,102 名のうち、重複、流産、不適当症例を除く、99,202 名のデータを用いて解析を行った。対象妊婦のうつ病発症リスクの評価は、妊娠初期、妊娠中・後期、産後 1 年に K6 質問票を用い、産後 1 か月、産後 6 か月にはエジンバラ産後うつ病尺度(EPDS)を用いて実施した。K6 の 13 点以上、EPDS の 9 点以上を抑うつ症状ありと、K6 と EPDS では先行研究で互換性が示されている。

結果:

生児を出産していない女性は、妊娠中および産後を通じて、高度の抑うつ症状の発症頻度が有意に高かった。高い抑うつ症状の有病率は、生児を出産していない 3 回以上の流産既往がある女性では、妊娠中、後期において有意に高かった。生児を出産していない 1 回の流産既往がある女性では、産後の抑うつ症状の発症リスクが低い傾向にあった。IVF-ET は、生児を出産していない女性において、すべての妊娠期間、産後 1 か月および 6 か月における抑うつ症状の発症リスクの低減と関連していた。

考察(研究の限界を含める):

3 回以上の流産既往がある生児を出産していない女性では、その後の妊娠中に心理的ストレスをより多く抱えている可能性があるため、特に妊娠中、後期に向けて適切な社会的・心理的支援が必要となる。一方、1 回の流産既往がある生児を出産していない女性では、1 回の流産の経験が産後の抑うつ症状の発症リスクを抑えた可能性がある。さらに、IVF-ET は妊娠中の抑うつ症状の発症リスクに影響を与えず、むしろ生児を出産していない女性ではリスクが有意に低下していた。産後のうつ症状については、生児を出産したことのある女性では有意差を認めなかったが、生児を出産したことのない女性では発症リスクが有意に低下しており、出産により、心理的苦痛が取り除かれたためと推察された。研究の限界としては、本研究では登録時の平均妊娠週数が 14.4 週であり妊娠前のうつ病症状の有病率が不明であること、妊娠期と産後期で異なる尺度が用いられたことが挙げられる。

結論:

3 回以上の流産既往がある生児を出産していない女性では、妊娠中、後期の抑うつ症状の発症リスクが高まるため、社会的・心理学的なサポートが必要となる。RPL と IVF-ET は産後うつ病に影響を与えず、むしろ IVF-ET は生児のいない女性において、妊娠中から産後にかけて、抑うつ症状の発症リスクを減少させる。